



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Prenominal phrasal adjective の構造 : 「名詞＋分詞」の場合
Author(s)	葛西, 清蔵
Citation	北海道大學文學部紀要, 25(1), 91-117
Issue Date	1976-11-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33405
Type	departmental bulletin paper
File Information	25(1)_PL91-117.pdf



Prenominal phrasal adjective の構造

——「名詞＋分詞」の場合——

英 語 学 講 座

葛 西 清 蔵

Prenominal phrasal adjective の構造

——「名詞＋分詞」の場合——

英 語 学 講 座

葛 西 清 蔵

(英文題)

The structure of prenominal phrasal adjective.

—— ‘noun + participle’ ——)

小稿の目的は prenominal phrasal adjective のうち「名詞＋分詞」の形をもつものの構造を調べることであるが、つぎの順序にしたがって論を進めることにする。

1. 「名詞＋分詞」のタイプ
2. 変形生成文法にそって各タイプの規則化
3. 「名詞＋分詞」の前置の条件
4. 残る問題とまとめ

1.1. まず「名詞＋現在分詞」の形をもつものから見ていく。⁽¹⁾

- (1) a. hair-raising stunts
b. stunts which raise your hair (タイプA)
- (2) a. the church-going people
b. the people who go to church (タイプB)

(1), (2) の例を比較すると,

- ① (b) の修飾節の動詞が (a) では現在分詞であり,
- ② その動詞のあとの名詞は (限定詞があればそれを失って——これは「名詞+分詞」のすべての「名詞」にあてはまる——) (a) では現在分詞の前におかれる。

という点では共通である。しかし,

- ① 動詞が (1) では他動詞,
- ② (2) では自動詞で, (2 b) にある前置詞が (2 a) では現れない,

という点で明白に区別されるものである。

(3) the sea-going ship

(4) the law-abiding people

も同じタイプに属するものである。「名詞+現在分詞」にはこの二つのタイプしかない。

つぎに「名詞+過去分詞」の例。

(5) a. a country-bred boy

b. a boy who was bred in the country

(6) a. the moth-eaten cloth

b. the cloth that is eaten by a moth

(7) a. the machine-made dress

b. the dress that is made by machine

(タイプC)

これらはつぎの点で共通の性質をもつ。

- ① (a) の head-noun は (b) では他動詞の目的語であり,
- ② (b) では前置詞の目的語となっている「名詞」が (a) では「分詞」の前にある,
- ③ (b) の前置詞 (「手段」, 「場所」, 「行者」などを表わす) (Zandvoort, 1960, p. 284)) は (a) では現われない。

さらに,

- (8) a. duty-paid articles
- b. articles on which customs or
excise duty has been paid (タイプD)

をみると, これは,

- ① (b) で関係代名詞の前に前置詞をもつ,
- ② 「名詞+分詞」の「名詞」が「分詞」となっている動詞 pay の目的語である,

という点で他の例から区別される。

- (9) a. dog-tired creatures
- b. creatures which are as tired as a dog
(after a long chase) (タイプE)

は,

- ① 「分詞」がほとんど形容詞化している,
- ② 「名詞」dog が「程度」を示す語にすぎない (cf. dog-weary, knee-deep)

という点でそれぞれ特徴的である。

- (10) a. a swan-necked umbrella
b. an umbrella which has a swan-neck
c. an umbrella with a swan-neck (タイプ F)

これはごく一般的なもので、

①この -ed は ‘possessed of’ (C. O. D) を意味し、『名詞＋名詞』
をもった」とみるべきものである。いわゆる擬似過去分詞といえ
⁽²⁾
る。

②したがって (b), (c) のように ‘which has,’ ‘with’ で表わせ
⁽³⁾
る。

以上が「名詞＋分詞」の形をもつ prenominal phrasal adjective の
すべてのタイプである。これらはそれぞれについてあげた点で明確に性
質の違いを示しており、筆者の集めた 700 近い例はすべて曖昧さなくこ
れらのいずれかに分類することができる。

しかしこの「名詞＋分詞」を head-word との関係でみると問題は急
に複雑になる。たとえば、

- (11) a. English-speaking peoples は
b. peoples who speak English

の関係がなりたつので、

- (12) (= (1. a)) hair-raising stunts

と同様に扱うことができるが、

- (13) English-speaking tide

(14) French-speaking region

はそうはいかない。また、

(15) (= (9. a)) duty-paid articles

(16) duty-paid stores

では duty-paid が head-word, 'articles,' 'stores' に対する意味関係がまったく違う。

(17) a. (= (2. a)) the church-going people

(18) a. the church-going bell

を比較すると, (17 a), (18 a) はそれぞれ,

(17) b. (= (2. b)) the people who go to church

(18) b. the bell for going to church

となり (18 a) はむしろ

(19) a. gun powder

b. powder for guns

の関係に等しいものである。

このように「名詞+分詞」と head-word との関係をすべて、修飾語と head-word の関係一般に置きかえてしまうと問題は複雑になりすぎ⁽⁴⁾ 小稿の範囲をこえるので、ここでは、(13), (14), (16) 等の関係のものは一応除き、「名詞+分詞」と head-word の関係が (1) から (10)

までの central な場合に⁽⁵⁾限ることとする。

1.2. 例が少いタイプもあり、また最終的には「名詞＋形容詞」,「形容詞＋分詞」,「副詞＋分詞」などの場合との関連で扱われなければいけないので、ここで一般化をいそぐことは意味が少いかも知れないが便宜上それぞれのタイプを一般的な形に記号化してみる。(限定詞のない例も限定詞がつきうる場合を考慮して()を付しておく)。

A. hair-raising stunts

$(D_1) N_1 - \text{Ving } N_2 = (D_1) N_2 R V (D_2) N_1$

B. the church-going people

$(D_1) N_1 - \text{Ving } N_2 = (D_1) N_2 R V P (D_2) N_1$

C. the moth-eaten cloth

$(D_1) N_1 - \text{Ven } N_2 = (D_1) N_2 R \text{ be Ven } P (D_2) N_1$

D. duty-paid articles

$(D_1) N_1 - \text{Ven } N_2 = (D_1) N_2 P R (D_2) N_1 \text{ be Ven}$

E. dog-tired creatures

$(D_1) N_1 - \text{Ven } N_2 = (D_1) N_2 R \text{ be Adv (=as)}$
 $\text{Ven } C (=as) (D_2) N_1$

F. a swan-necked umbrella

$(D_1) N_1 - N_2 \text{ en } N_3 = (D_1) N_3 R V (=have (D_2) N_1 - N_2$
 $= (D_1) N_3 P (=with) (D_2) N_1 - N_2$

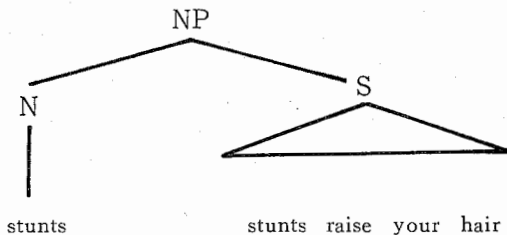
(D: 限定詞, N: 名詞, V: 動詞, P: 前置詞, Adv: 副詞, C: 接

続詞, -ing: 現在分詞形態素, -en: 過去分詞形態素)。

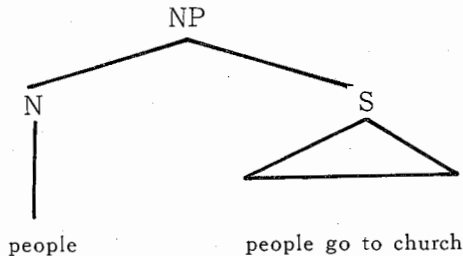
2. 上でみたような (a) と (b), (c), との関連性はどうか体系的に説明すべきものであろうか。(a), (b), (c) はそれぞれ変形体の関係にある, とだけすることもできようが, さらに変形生成文法のやり方にしたがって互の関係を説明することもできる。前置詞の出没はそれ自身興味深い扱いができるであろう。ここでは標準的な変形生成文法にしたがって (b) から (a) を導き出すという方法で説明してみることにしたい。

2.1. まず各タイプの代表的な例はそれぞれの (b) が示すように概略つぎのような基底構造をもっていると考えられる。

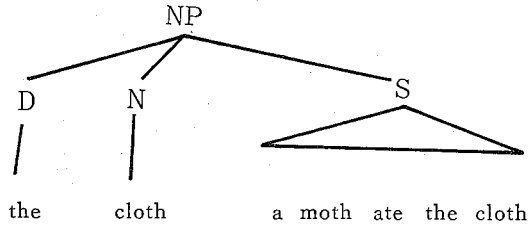
A. hair-raising stunts



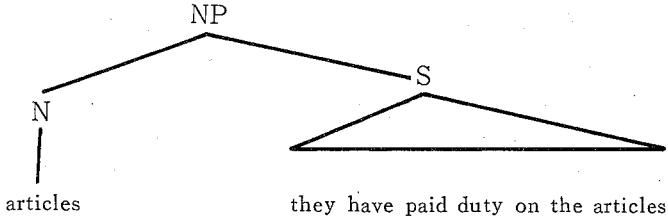
B. church-going people



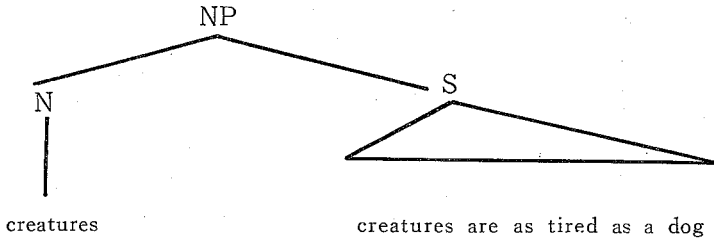
C. the moth-eaten cloth



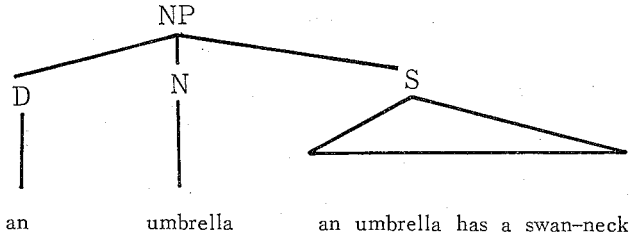
D. duty-paid articles



E. dog-tired creatures



F. a swan-necked umbrella



ここから各タイプの例を導きだすために必要な変形規則は、

- T—1. NP に支配されている文 S を関係節化する（関係節化変形）,
- T—2. 埋めこまれた文 S を必要に応じて受動態にする（受動化変形）,
- T—3. 埋めこまれた文 S が単純時制のときは拡充時制に変える,
- T—4. 関係代名詞とそのあとの be 動詞を含む部分の消去（whiz 消去変形⁽⁶⁾）,
- T—5. 消去のあと残った「分詞」,「名詞」（「名詞」に限定詞, 前置詞があればそれらを消去し）「名詞＋分詞」の順にし（hyphen でつなぎ⁽⁷⁾）head-word の前に移行する。

でなければならない。

これらの必要な変形規則のうち T—1, T—2 は一般的なもので問題はない。T—2 はここでは bc 動詞と過去分詞を導きだすものである。T—3 はかなり ad-hoc な性格のもので、これは bc 動詞と現在分詞を引きだすための全く操作上の単なる手続き（Eschliman et al., 1968, p. 41）にすぎないが、全体の説明上是非とも必要なものである（これは T—5 と重要な関連をもっているので更に後に問題にする）。T—4 で消去されるのは関係代名詞, be 動詞ばかりでは例もあるのできれいな一般化は無理で、つぎに見るように個別的に規則だてるしかない。

それぞれのタイプの派生過程を、すでにあげたような関連性に従い、T—1～T—5 を使って必要な規則をかきだせば次のようになる。

A. stunts [stunts raise your hair]

⇒ hair-raising stunts

$(D_1) N_1 [(D_1) N_1 V (D_2) N_2]$	
$\Rightarrow (D_1) N_1 R V (D_2) N_2$	T-1
$\Rightarrow (D_1) N_1 R \text{ be Ving } (D_2) N_2$	T-3
$\Rightarrow (D_1) N_1 \text{ Ving } (D_2) N_2$	T-4
$\Rightarrow (D_1) N_2\text{-Ving } N_1$	T-5

B. people [people go to church]

$\Rightarrow$ church-going people

$(D_1) N_1 [(D_1) N_1 V P (D_2) N_2]$	
$\Rightarrow (D_1) N_1 R V P (D_2) N_2$	T-1
$\Rightarrow (D_1) N_1 R \text{ be Ving } P (D_2) N_2$	T-3
$\Rightarrow (D_1) N_1 \text{ Ving } P (D_2) N_2$	T-4
$\Rightarrow (D_1) N_2\text{-Ving } N_1$	T-5

C. the cloth [a moth ate the cloth]

$\Rightarrow$ the moth-eaten cloth

$(D_1) N_1 [(D_2) N_2 V (D_1) N_1]$	
$\Rightarrow (D_1) N_1 R (D_2) N_2 V$	T-1
$\Rightarrow (D_1) N_1 R \text{ be Ven } P (D_2) N_2$	T-2
$\Rightarrow (D_1) N_1 \text{ Ven } P (D_2) N_2$	T-4
$\Rightarrow (D_1) N_2\text{-Ven } N_1$	T-5

D. articles [they have paid duty on the articles]

$\Rightarrow$ duty-paid articles

$(D_1) N_1 [(D_2) N_2 V (D_3) N_3 P (P_1) N_1]$

$\Rightarrow (D_1) N_1 P_1 R (D_2) N_2 V (D_3) N_3$ T-1

$\Rightarrow (D_1) P_1 R (D_3) N_3 \text{ be Ven } P_2 (D_2) N_2$ T-3

$\Rightarrow (D_1) N_3\text{-Ven } N_1$ T-4~5

E. creatures [creatures are as tired as a dog]

$\Rightarrow$ dog-tired creatures

$(D_1) N_1 \text{ be Adv. (=as) Ven C (=as) } (D_2) N_2$

$\Rightarrow (D_1) N_1 R \text{ be Adv. Ven C } (D_2) N_2$ T-1

$\Rightarrow (D_1) N_1 \text{ Adv Ven C } (D_2) N_2$ T-2

$\Rightarrow (D_1) N_2\text{-Ven } N_1$ T-5

F. an umbrella [an umbrella has a swan-neck]

$\Rightarrow$ a swan-necked umbrella

$(D_1) N_1 [(D_1) N_1 V (=have) (D_2 N_2-N_3)]$

$\Rightarrow (D_1) N_1 R V (D_2) N_2-N_3$ T-1

$(\Rightarrow) (D_1) N_1 P (=with) (D_2) N_2-N_3)$

$\Rightarrow (D_1) N_2-N_3 \text{ en } N_1$ T-5

これが埋めこまれた文 S から「名詞+分詞」を導きだす規則のすべてである。これらのうち hair-raising のようなごく一般的な例は個別的にとりあげられることもあるが、他も含めて exhaustive に扱われたことはないようである。やや体系的に扱われているのは、Lees (1968) の、

(T83) $X-N+N^0-(\text{prev}) \left\{ \begin{array}{l} \text{Ing}+V_i \\ \text{Ing}+V_{tn}+\text{Nom} \\ \text{En}+V_{tn}+\text{by} \end{array} \right\} ((\text{Adv}_a) \text{ Adj}+\text{Ly})-Y$

$$\rightarrow X - (\text{prev}) ((\text{Adv}_a) \text{Adj} + \text{Ly}) \left\{ \begin{array}{l} \text{Ing} + \text{Vi} \\ \text{Non} + \text{Ing} + \text{Vtn} \\ \text{Nom} + \text{Eo} + \text{Vtn} \end{array} \right\} N + N^{\circ} + Y$$

であろう。しかしこれで扱えるのは、われわれの

(1 a) hair-raising stunts

(6 a) the moth-eaten cloth

だけである。

(8 a) duty-paid particles

(9 a) dog-tired creatwres

のような特殊な例はともかく、

(2 a) the church-going people

にするためには

$$N + N^{\circ} [\text{Ing} + \text{Vi} + \text{P}(\text{reposition}) + \text{Nom}] \dots$$

を加えて、(T83) の

$$[\text{Ing} + \text{Vi}] \text{ は } [\text{Ing} + \text{Vi} (+\text{P} + \text{Nom})]$$

としなければならない。また

(5 a) a country-bred boy

のためには (T83) の

$$N+N^{\circ} \left[\begin{array}{c} \dots \\ \text{En} + \text{Vtn} + \text{by} + \text{Nom} \\ \dots \end{array} \right] \dots$$

の by を P(reposition) と一般化するなどかなどかなりの修正が必要である。

3. 「名詞+分詞」を導きだす規則のうちでもここで重要なのは T-4, T-5 である。T-4 についてはすでにふれたのでさておいて, T-5 の「分詞」を head-word に前置する規則の適用については考慮すべき重要な点が二つある。

3.1. まず, 一般に「分詞」の前置が意味の違いを起こしてしまう場合がある。

(21) These difficulties *overcome* makes the rest easy.

のように Nexus がそのようにがそのまま主語になっていて, 分詞の前置を許さない場合は別にしても,

(22) a many times *exploded* éror

(23) an *unheard* of crime

のように仮りに前置されても強勢との関係で記述的なもの (= (22)), 分類的なもの (= (23)) などのようにごく一般の形容詞の用法とかわらないものがある。また,

- (24) Boys neglected were boys lost.

では故意に前置しないことによって文体的な効果を求めようとする (Curme, 1935, p. 65) 場合などもある。しかし,

- (25) a. a man shot
b. a man who has just been shot

では, shot は動詞的力 (force) もなお顕著であり同格的に後置されている。この例は (b) の ‘has just been shot’ でも明白なように, 「ある一定時の状態」をのべたものであるが, これは,

- (26) The nun singing is popular.

- (27) The singing nun is popular.

において, (26) のように「分詞」が後置されたときには「一時的な状態」(‘a momentary state’), (27) のように前置されたときには, 「基本的な属性」(‘a basic attribute’) をあらわす (Malstrom & Weaver, 1973, pp. 188-190; Allan, 1973; Bolinger, 1972; Ouirk & Greenbaum, 1973, pp. 396-398) 点で違うということに明らかに通じるものである。

「分詞」が後置されるときには「一時的な状態」, 前置されるときには「基本的な属性」を表わす, というのは, Nexus は動きのある ‘process’ を表わすが, Junction は動きのない ‘picture’ である (Jespersen, 1955, p. 116; 1956. p. 95) ためであることは明白である。この違いが固定的になっていると思われるのが, たとえば,

- (28) The problem *involved* is basically simple. に対する

(29) an *involved* argument.

である。(28) のように分詞が後置された場合には、「いまここにかかわっている ('which is involved in the matter under consideration') (Christophersen & Sandved, 1971, p. 129) という意味だが、(29) のように前置されると時間とかかわらない 'complex, confused' という特定の意味に限定され、はっきり一個の形容詞として扱われるようになる。

(30) the original meaning of the actual word *used* is lost.

(31) *used* cars.

の *used* についても全く同様である。

すなわち、Nexus 関係にあるために前置することができない場合 (= (21)), 表層的、文体的な意味の違いを起こす場合 (22), (23), (24)), を別にすれば、「分詞」を head-word の前に移行するについては次のような条件が要ることになる。

(32.1) 「分詞」が一時的な状態ではなく、基本的・一般的な属性を表わす場合には head-word の前に移行する。

(32.2) 'involved,' 'used' のような例では、それぞれ 'complex,' 'confused,' 'secondhand' のような特定の限定された意味の場合に head-word の前に移行する。

もちろん、'complex, confused,' 'secondhand' は一時的というよりはむしろ時間とはかかわらない属性と考えて (32.2) を (32.1) に含めてしまうことは不合理ではないので、以後 (32.1), (32.2) を一緒にして (32) とすることにする。

(32) は意味に関することであるがこれを統語論の中に位置づけるには V の範疇を「基本的な属性を表わすもの」〈+basic〉, 又は 〈-temporary〉と「一時的な性質を表わすもの」〈-basic〉, 又は 〈+temporary〉という特徴をもつものに分類し, 前者の特徴をもつ動詞の場合にのみ, その動詞から生じる分詞を前置する変形が義務的になされることにすればよい。

この条件は「分詞」に限らず head-word に対する修飾語の前置について広くあてはまると考えられる (Bolinger, 1972; Allan, 1973; Quirk & Greenbaum, 1973, pp. 396-398)。しかし「現在分詞」の前置に限って言えば, この (32) はもう少し具体的な形で表わすことができる。いま,

(33) The nun is singing.

(34) The nun sings.

において (33) が一時的な状態, (34) が一般的な属性をあらわす (Malstrom & Weaver, 1973, pp. 188-190) とすれば, すでにあげた

(35)(= (26)) The nun singing is popular.

(36)(= (27)) The singing nun is popular.

の基底にはそれぞれ,

(37) The nun [the nun is singing] is popular.

(38) The nun [the nun sings] is popular.

があると考えられる。ところが be 動詞, 現在分詞を引きだすための全く操作上の単なる手続きとして必要とされた規則 T-3, すなわち埋めこまれた文 S の単純時制を拡充時制にする規則を (38) に適用すると

結果的に (37), (38) はともに

(39) The nun who is singing is popular.

となり (37), (38) (または (35), (36)) の区別ができなくなってしまう。つまり単なる操作上の必要からとはいえ、単純時制を拡充時制に変える変形には「分詞」が「一時的な状態」, 「基本的な属性」のどちらを表わすのか, という区別を無視してしまう「強すぎる一般化」があったのである。したがって, (35) (= (26)), (36) (= (27)) の違いを明確に保つには T-3 によって生じた「分詞」の前置に限り (32) を

(40) 埋めこまれた文 S の時制が単純時制である場合は, それを
拡充時制にした結果生ずる「現在分詞」を head-word に前置
できる,

とすることができる。これで「一般的な状態」を表わす例は,

(41) (= (37)) The nun [the nun is singing] is popular.

⇒ (39) The nun who is singing is popular. T-1

⇒ ((35=(26))) The nun singing is popular. T-4

のように変形がおわる。

また「基本的な属性」を表わす例は,

(42) (= (38)) The nun [the nun sings] is popular.

⇒ The nun who sings is popular. T-1

⇒ (39) The nun who is singing is popular. T-3

⇒ The nun singing is popular T-4

⇒ (27) The singing nun is popular T-5

まで変形が適用され、二者の違いを示すことができる。Adj(ective) N(oun) と N(oun) Adj(ective) では、前者が一般的、後者が一時的な性質を表わすという違いがあるのとともに N. is Adj. から変形によって導き出される、とするのには問題がある (Bolinger, 1967) とする疑問は、われわれの場合に関する限り今みたような方法によって解消することができる。

3.2. 一般に「分詞」は条件 (32) (あるいは現在分詞については (40)) を満足させる限り前置できることになるが、ここでさらに考慮すべき点がある。たとえば、

(43) a. the man who was killed

⇒ b. the man killed

T-4

は許されるが、これが

⇒* c. the killed man

T-5

はできない。しかし 'core' になっている 'kill' の意味がもう少し 'elaborate' にされて

(44) the murdered (drowned, stabbed, electrocuted, decapitated, slaughtered, etc.) ⁽⁸⁾ man.

はできる (Barkai, 1972)。

ここで興味ぶかいのは 'core' になっている 'kill' の意味が 'elaborate' にされるとき、それがたとえば 'murder' のように一語になって表現されてる必要はなく、

(45) the brutally killed man.

のように別個の修飾語として付加されていてもよい (Sussex, 1972) ということである。Ljung (1976) は a sided box⁽⁹⁾が許されないのは box は本来 side をもっているものであり、これでは何の新しい情報も与えられないからである。a many-sided box のように side を更に限定する語が来れば許されるのは、これで新しいことが伝えられるという、'pragmatic' なものである、とのべていることとも共通する。つまり「分詞」の前置に関するいま一つの条件は、

(46) 「分詞」の意味が何らかのかたちで elaborate にされている時にのみその「分詞」は head-word に前置できる。

ということになる。

ところで, Fries は the dark green house について, dark は green を修飾するがそれは dark が green の前にあるという 'the pressure of word order pattern' (1964, p. 200, pp. 203-204) のためだといっている。われわれが「名詞+分詞」としてみてきたこの「名詞」はまさに dogtired, machine-made, ocean-going などに典型的に見られるように程度, 手段, 場所などを表わし, あとの「分詞」の意味を elaborate にする働きをしているにほかならない。Potter (1971) は 'air-minded' の air について 'prefixed with the function of adverb' といっているが「名詞+分詞」の「名詞」は埋めこみ文のときにもつ限定詞, 複数形態素, (前置詞があればそれも含めて) をなくした形 (Bradley, 1975, p. 93) になり名実ともに「分詞」に対する修飾語にふさわしくなる。⁽¹⁰⁾ 多少議論はあれ「名詞+分詞」+head-word は Junction をなしており III+II+I という rank をつくっていると考えらるべきであろう。段階的に意味が特殊化されている ('...reaches farther in specialization') (Jesper-

sen, 1955, p. 108) といえるからである。ここにも「名詞＋分詞」を導きだす変形規則は a dog which runs fast. $\Rightarrow$ a fast-running dog に見られる規則と本質的には何らかわらない一般性をもつものであることがうかがえる。

以上のように「分詞」の前置については、

①「分詞」の意味が「基本的な属性」を表わすものであるかどうか
(=32))

②「分詞」の意味が 'elaborate' なものであるかどうか (=46))

を考慮しなければならないが、「名詞＋分詞」の「名詞」はまさに②を満足させるものであるから、T-5 の「分詞」前置の規則は、①がすでに述べたような方法で位置づけられている限り常に適用できることになる。

4. おわりに「名詞＋分詞」を導きだすことに関連するいくつかの残る問題を整理してみたい。

すでに見たように「名詞＋分詞」の「名詞」は何らかの方法で「分詞」の意味を修飾していると考えられるが、この「分詞」には、実は、さまざまな性質のものがあつた他の品詞とのかかわりを無視するわけにはいかない。たとえば dog-tired, air-minded の tired, minded は普通形容詞として扱われているものである。当然 dog-tired は dog-weary との関係、duty-paid は duty-free との関係を考慮しないわけにはいかない。

church-going people と church-going bell における church-going の扱い方のちがいの問題もいずれ他の例との関係の中で説明されなくてはいけないものであろう。

もう一つの大きな問題は、前置される「分詞」の「core」の意味が 'elaborate' になる」ということについてである。'core' を一応 'hammer' における 'drive', 'saw' における 'cut' など 'the verbal sense

that is basic to their (=verbs) meaning' (Langendoen, 1970, p. 83) としても, この 'core' の意味が 'elaborate' になるとき, その程度は問題にならないであろうか。'core' とされているものが実は別の 'core' の 'elaborate' にされたものであるような場合が考えられはしないだろうか。

さらに 'elaborate' について。本来それだけでは attributive としては使えないはずの語が, 修飾語がついて意味が限定されると, つまり意味が 'elaborate' にされれば,

(49) *the half-asleep children, a somewhat afraid soldier, a really alive student* (Quirk & Greenbaum, 1973, p. 137. n.)

のように前置できる, ということとはあるとすれば一体どんな関係があるのであろうか。

このように, 関連して考えなければいけないことは多いが, さしあたって「名詞+分詞」に限ってそのタイプとそれに必要な規則(一般的なものは省く)をかきだすとつぎのようになる。

A. hair-raising (stunts)

S. D. (D₁) N₁ R be Ving (D₂) N₂

1 2 3 4 5 6

S. C. 1 2 3 4 5 6 (⇒ 1 2 4 5 6)

⇒ 1 6 4 2

heart (or soul)-stirring, ear-splitting,

flower-bearing, mouth-filling, world-

shaking, truth-telling, meaning-

preserving, ...

B. church-going (people)

S. D. (D₁) N₁ R be Ving p (D₂) N₂

1 2 3 4 5 6 7

S. C. 1 2 3 4 5 6 7 ($\Rightarrow$) (1 2 4 5 6 7)

$\Rightarrow$ 1 7 4 2

ocean-going, law-abiding, sea-going,

theatre-going, night-faring, ...

C. moth-eaten (cloth)

S. D. (D₁) N₁ R be Ven p (D₂) N₂

1 2 3 4 5 6 7

S. C. 1 2 3 4 5 6 7 ($\Rightarrow$) 1 2 4 5 6 7)

$\Rightarrow$ 1 7 4 2

country-bred, machine (*or* hand)-made,

book-learned, custom-built, wind-swept,

nose-led, Moscow-sponsored, famine

(*or* owe, terror)-stricken, Cambridge-

educated, self-addressed, self-centered,

phonology-focused, grass-covered, ...

D. duty-paid (articles)

S. D. (D₁) N₁ P R (D₂) N₂ be Ven

1 2 3 4 5 6 7 8

S. C. 1 2 3 4 5 6 7 8 $\Rightarrow$ 1 5 7 2

all expense paid (cf. crest-fallen, heart-broken).

E. dog-tired (creatures)

S. D. (D₁) N₁ R be Adv. (=as) Ven C.(=as) (D₂) N₂

1 2 3 4 5 6 7 8

S. C. 1 2 3 4 5 6 7 8 (=> 1 2 4 5 6 7 8)

=> 1 8 5 2

F. swan-necked (umbrellas)

S. D. (D₁) N₁ R V (=have) (D₂) N₂

1 2 3 4 5 6

S. C. 1 2 3 4 5 6 => 1 6 en 2

monkey-faced, Janus-faced,

lion-hearted, iron-hearted, ...

notes

(1) ここに使う例はすべて実際に集めたものであり (b) 以下は (a) のパラフレーズである。もちろん知的意味がおなじものであり、表層的、文体的な意味の違いは含めない。

(2) この 'neck, は動詞としての 'hug, embrace' (C. O. D.) の意味をもっていない。

(3) Fillmore (1969) は 'have' を 'be with' から導き出しているが、それに従えば、

(4) d. an umbrella which is with a swan-neck とも出来てあとで消去する時に都合がよい。

(4) Katz J. J. & J. A. Fodor, 1964, p. 489.

(5) Quirk. R. & S. Greenbaum, 1973, p.121. "..... in *that old man*, *old* in central adjective..... and we can relate *that old man is old*."

(6) a. *the things which are $\left\{ \begin{array}{l} \text{desired} \\ \text{liked} \\ \text{wanted} \end{array} \right\}$ by most people are worthless.

b. The things $\left\{ \begin{array}{l} \text{desired} \\ \text{liked} \\ \text{wanted} \end{array} \right\}$ by most people are worthless.

(Postal, 1974, p. 180)

のような idiolect,

‘whiz’ 消去が ‘reduction of emphasis,’ ‘a matter of euphony’ とする (Jacob, 1973, p. 94) など文体的なことは考慮にいれない。

(7) “the hyphen is … the subject of much controversy … and agreement on a set of rules seem to be unreachable.” (Onions, 1965, p. 43)

(8) ‘murder’ = ‘kill in a manner which is intentional or premeditated.’ もちろん ‘elaborate’ 自体についても問題がのこる。ただ、前置すると意味が、一般的、基本的な属性を表わすことになるので、分類的 (classifying) であるためにはできるだけ意味が限定されていることは必要であろう。

(9) この間のことは生成意味論の立場からみるときわめて興味ぶかい点である。

(10) Quirk & Rosenbaum (1973, p. 398) は ‘adverbially modified’ の場合は前置できるとして a newly-born child などをあげている。

References

- Allan, K. 1973 “Complement Noun Phrases and Prepositional Phrases, Adjectives and Verbs” *Foundations of Language*. Vol. 10, No.3
- Barkaï, M. 1972. “On the Shiftability of Past Participles in English” *Linguistic Inquiry* Vol. 3. No.3 pp. 377-378.
- Beard, R. (1976) *Journal of Linguistics* 12. pp. 155-157.
- Bolinger, D. L. 1967. “Adjectives in English, Attribution and Predication” *Lingua* 18. pp. 1-34
- 1971. *The Phrasal Verb in English* Harvard Uni. Press.
- 1972. “Linear modification” *Syntax Theory* I. (ed.) Housholder, T. W. Penguin Modern Linguistic Reading. pp. 31-50
- Bradley, H. 1975. *The Making of English*. Seibido (Tokyo)
- Christophersen, P. & A. O. Sandved. 1971. *An Advanced English Grammar*. Macmillan (London)
- Curme, G.O. 1935. *Syntax*. Maruzen (Tokyo)
- Eschliman, H. R. et al. 1968. *Generative English Handbook* Wadsworth (California)
- Fillmore, C. G. 1969. “Toward a Modern Theory of Case” in *Modern English Studies* (eds.) Reibel & Shane. Prentice-Hall (New Jersey).
- Fries, C. C. 1940. *American English grammar*. Maruzen (Tokyo)

- Jacobs, R. a. 1973. *Studies in Language* XEROX(Massachusetts)
- Jespersen, O. 1956. *Essentials of English Grammar* George Allen & Unwin Ltd. (London)
- 1955. *Philosophy of Language* George Allen & Unwin Ltd. (London)
- Katz, J. J. & I. A. Fodor. 1964. "The Structure of Semantic Theory" in *Readings in the Philosophy of Language*. Prentice-Hall.
- Langendoen, D. T. 1970. *Essentials of English Grammar*. Holt, Rinehart and Winston (New York)
- Lees, R. B. 1968. *The Grammar of English Nominalizations*. Mouton.
- Ljung, M. (1976) "-ea adjectives revisited" *Journal of Linguistics*. 12. pp 159—168.
- 林語堂 1935.『開明英文法』山田訳 文建書房
- Long, R. B. & D. R. Long. 1971. *The System of English Grammar*. Scott, Foresman (London)
- Malstrom, I. & C. Weaver. 1973. *Transgrammar* Scott, Foresman (London)
- 中島, 文雄 1972.「BE 動詞に対して」『英語展望』No. 13
- Onions, C. T. 1924. *An Advanced English Syntax*. Kegan Paul (London)
- 1965. *The English Language* Senjo (Tokyo)
- 大塚, 敬 1971.「名詞複合修飾語の前置について」『英語学』第一号 開拓社
- Poutzma, H. 1927. *A Grammar of Late Modern English* Senjo (Tokyo)
- Postal, P. M. 1974. *On Raising*. The M. I. T. Press.
- Potter, S. 1971.『Modern Linguistics. Andre Deutsh.
- Sussex, C. T. 1972. "The Deep Structure of Adjective in Noun Phrase" *Journal of Linguistics*. Vol. 10. No. 10.
- Sweet, H. 1958. *New English Grammar* Part II. Oxford Uni Press.
- Vallins, G. H. 1966. *The Pattern of English* Andre Deutch
- Zandvoort, R. W. 1960. *A Handbook of English Grammar*. Maruzen (Tokyo).